■読売新聞2018年11月1日(木)掲載記事 『平成時代静岡空港(下)』

平成時代
静岡空港
下

近くに空路 商機広がる

静岡空港は静岡と世界の距離を縮め、国内各地との交流を生んでいる。

10月15日、JA静岡経済連の輸出担当者らが空港を訪れ、貨物スペースにパレットに載せられた箱を積み込んだ。イチゴの輸出が本格化する年明けに向け、輸出用のパレットを開発するためだ。イチゴは静岡空港から那覇に運ばれ、積み替えられて翌朝には香港に届く。

JA静岡経済連・輸出推進課の望月洋平さん(41)によると、以前はイチゴを福岡空港まで車で運び、貨物機に載せたこともあったが、長時間の振動で傷んだという。静岡空港からの昨年度のイチゴの輸出は2・3万㌔で、今年度は5万㌔を目指す。

富士宮市でランを栽培している「石川洋蘭園」は、成田空港経由だった台湾からの苗の輸入を、2012年から静岡空港に切り替えた。園長の石川哲郎さん(40)は「静岡空港は貨物の扱いが丁寧。近いので、自分で取りに行くこともできる」と話す。

年明けに本格化するイチゴ輸出に向けた積み込みのチェック作業（静岡空港で）

輸出入 手間と時間省く

輸出入だけではない。静岡空港で唯一、1日4往復している福岡便は、出張に多く活用されている。福岡・静岡両県で飲食店を経営する桜井俊一さん(53)は、多いときには月に2回、静岡―福岡便を使う。「静岡は駐車場が無料なのも便利」という。

ビジネス以外でも、今年の出雲便の就航をきっかけに、「怪談」で知られる作家・小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）ゆかりの焼津市と、八雲がかつて暮らした松江市との交流が広がった。

また、昨年度には74校、約5000人の児童・生徒が、修学旅行で国内外に出発した。藤枝東高は16年度から、毎年12月にチャーター機を使い、7クラスの生徒と引率教員約300人が静岡空港から台湾に出発する。山本剛史教頭は「空港ができて、海外に行きやすくなった」と実感している。

◇

空港の利用者が増えてきたが、地元に恩恵をもたらすとは限らない。

牧之原市内で茶園や茶工場の見学が無料でできる「グリンピア牧之原」は、バスで立ち寄る韓国や中国からの団体客でにぎわうようになった。土産店は免税カウンターを設けるなどして、「売り上げが大幅にアップした」という。

一方で、団体客の立ち寄りコースになっている場所以外からは、「ほとんどメリットがない」との声も聞かれる。島田市は開港後、英語と中国語の観光パンフレットを作るなど外国人の受け入れ態勢を整えたが、「空港から市外や東京に行ってしまっている」と頭を抱える。市は今後、空港とを結ぶ周遊バスを走らせることを検討するという。

静岡経済研究所の玉置実主席研究員は、「空港によって静岡のことが地方や海外に知られ、足を運んでもらいやすくなった。今後は市町を越えた周遊バスなど、周辺自治体が一体となって、どう魅力的な地域を作っていくかが鍵になる」と話している。

（この連載は浜名恵子、余門知里が担当しました）